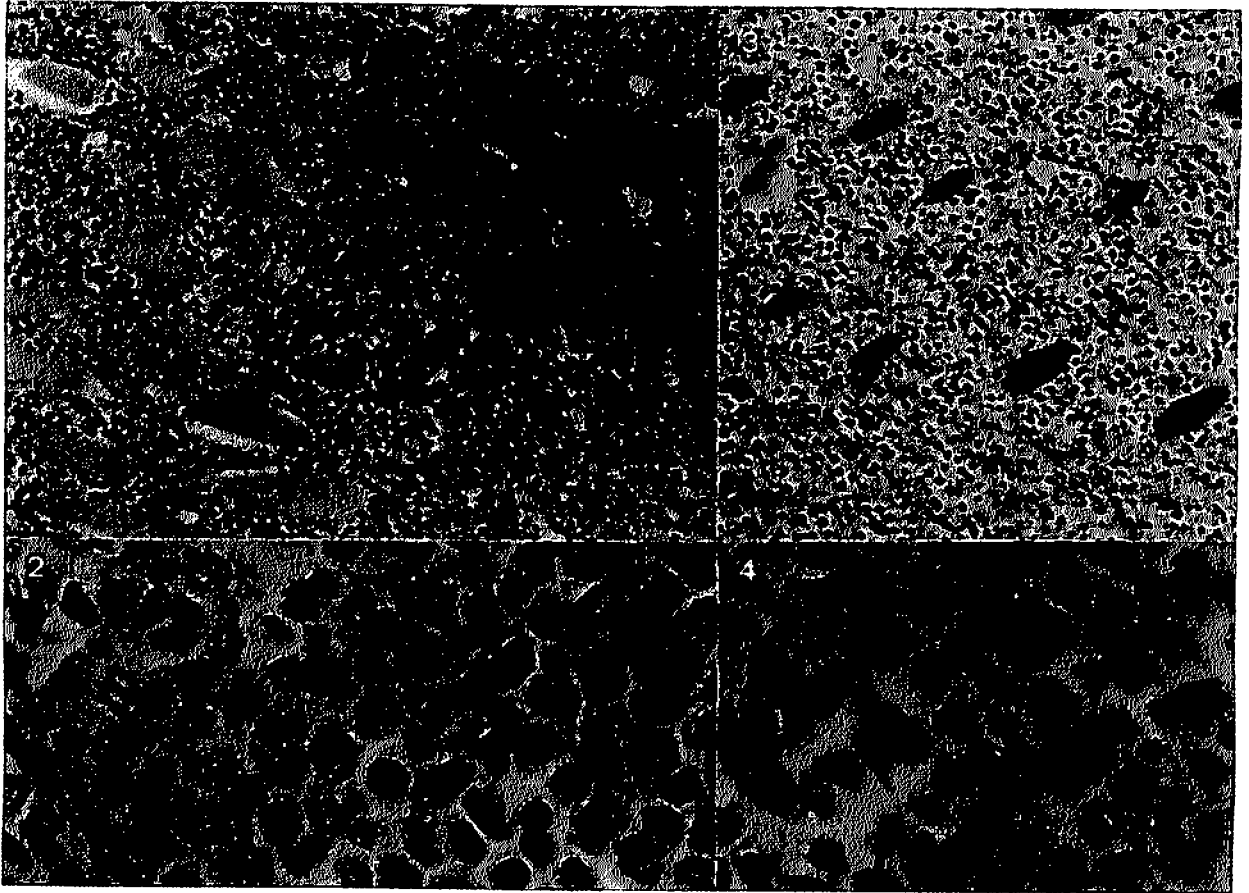


# 牛皮膚白血病の肋間筋内腫瘍

麻布獣医科大学家畜病理学教室出題

第19回獣医病理学研修会標本No. : 296



動物：牛（ホルスタイン），雌，15ヶ月令，黒白。  
一般臨床的事項：相模原市内で生まれ，少数飼養農家で育成中，昭和53年9月下旬発熱，乳頭腫脹，乳房腫瘤触知，乳房炎として加療。10月26日眼球突出に気付いた。以後，食欲不振で乳房異常も認められ，廃用。教材として大学に搬入後，次第に削瘦の度を増し，四肢，胸垂に浮腫発現，起立や歩行を嫌うようになり，11月8日剖検。血液検査結果（11月6日実施）：RBC313万/cm<sup>3</sup>，WBC 11.900/cm<sup>3</sup>，PCV27%；TP7.2g/dlで，白血球百分比は，好酸球1.25%，好中球は，桿状核7.25%，分葉核26.50%，リンパ球62.00%（少数の異型リンパ球を含む），単球2.70%。

主要剖検所見：全身皮膚に大小種々の腫瘍結節多発（背面により多い）。眼球突出に伴う角結膜炎と眼瞼炎。頭頸部～前縦隔の連続性腫瘍。全身リンパ節の腫瘍化。全身骨格筋内に大豆大～拇指頭大の灰白色腫瘍結節多発。その他の臓器にも，小腫瘍結節形成。

腫瘍の押捺像：ギムザ染色では，大型細胞が多く，不整形～類円形で，核はクロマチン疎，淡明，2～3個の核仁を見る。細胞質は比較的幅広く，淡青色にほぼ一様に

染まり，辺縁はやや濃染。メチルグリーン・ピロニン染色では，多くの腫瘍細胞の胞体は，ピロニンに淡く染まるが，胞体がピロニンに強く染まる細胞も散見された。提出標本の組織学的所見：腫瘤表層に近い部分では，腫瘍細胞は類円形～多角形で，大小不同はあまり目立たず筋線維間に充実性に増殖し，核仁も明らかで，有糸分裂像が多く，胞体は弱好塩基性であるが（写真1，×100写真2，×400），腫瘤深層では，細胞は比較的疎に配列し，変形，濃染するものが少なくなく，核はいずれも濃縮していた（写真3，×100・写真4，×400）

メチルグリーン・ピロニン染色では，押捺標本と同様にピロニンに淡染する胞体をもつ腫瘍細胞が主であるが，ピロニンに強染する細胞質をもつ細胞が，目をひいた。

腫瘤表層部と深層部の腫瘍細胞の形態的差異は，深層部における腫瘍細胞の萎縮・変性と看做されたが，牛白血病におけるピロニン好性細胞の出現が証明された。診断：標本については，多くの議論がなされたが，ピロニン好性細胞を認めた牛皮膚白血病の肋間筋内腫瘍とされた。